

2025年
3月号 No.15

サルビア訪問リハビリ新聞

発行日：令和7年3月4日 発行者：医療法人社団英世会 介護老人保健施設サルビア
〒191-0024 東京都日野市万願寺1-18-1 TEL042-589-3270 FAX042-589-3271



京王百草園

2024年3月1日撮影

京王百草園

「京王百草園」は江戸時代、松連寺を再建する際に造営されたことが始まりです。その後、昭和三二年に京王電鉄株式会社によって買収・整備され、京王百草園となっています。

梅の開花の季節には約五十種、五百本の梅たちが咲き競い、写真は三月一日に撮影したもので、園内全体では七分〜八分咲きの事です。

見晴台からは付近の自然が楽しめるほか、晴天であれば東京スカイツリーも眺められ、三月九日(日)まで、つるし飾りや雛人形が飾られる催しも開催中です。

駐車場が無く、息を切らしながら坂を歩いている方も多く見かけますが、それだけの価値があるからだと思えます。私もまだ入園した事はありませんが、一度は訪れたいと思う場所です。

人生の終い方

今回の内容は令和五年六月号に外出訓練で登場したMさんです。ご家族の許可を貰い、やや細かい内容を踏まえ、訪問リハビリでの支援内容やご本人について書かせていただきます。

元々Mさんは癌を患っており、闘病生活は約六年。訪問リハビリの開始は令和三年。外出は行っていない状況ではありませんが、体力が落ちないようにとの目的で運動療法中心に支援を開始しました。その中で生活の質の向上目的で立川にあるグリーンズプリングスへの外出訓練も行いました。

その後、通院の大変さはあったものの在宅生活が継続できているなか、令和五年十二月に体調不良にて入院。余命三ヶ月との診断を受けました。ベッド周囲での生活となり、施設での生活の話も挙がりましたが本人は

最後まで自宅で生活したいとの強い意志があり、在宅での生活を再開しました。本人の強い意志や頑張りから、ベッド周囲の生活が自宅内を歩行できるまでに改善されました。

余命宣告から約一年が経とうとしていた令和六年十二月、体調が再度悪化。本人の不安もありホスピス病院に入院され約半月後にご逝去されました。体調が悪く中でも、私の事を気にかけてくれた事や、様々なサービスを利用しながら懸命に在宅生活を続けていた姿等、最後まで力強く、自分の意思を持ち、人らしく生活されていた様子は忘れられません。また体調が悪く中でものリハビリは会話が多くなりました。その時に「リハビリの時だけは私らしい会話ができるから来てほしい」と言われた時は、とても救われました。

そして訪問リハビリの支援が終了した数週間後、我々支援者の元にご家族から一通の手紙が届きました。

〜一部省略〜

『メソメソジメジメした最期はいや。みんな笑って見送ってほしい。お世話になった皆様。ありがとう。また』

私は人生で初めてこのような体験をしました。いつもリハビリの際は体調が悪い日でも私の事を気に掛け色々な助言をしてくれました。そしてリハビリが終わり帰る際に、『では、また』と気持ちの良い挨拶をされるMさん。手紙にも書かれていた『また』から亡くなられても尚、周囲の人に気を遣い、また自分らしく最期を迎えたMさん。私へ多くの影響を与えてくれたMさん。『こちらこそ、ありがとうございました。また』

編集部員のつぶやき

現在四歳と一歳の息子が居る。日々の成長、特に兄が居る次男の成長の早さにも驚かされる。

そんなある日、長男が『「等」と「他」は何が違うの?』と突然質問をしてきた。初めは何を言っているのか理解できず、改めて質問の内容を息子に問うと、そうだと答える。恐らくテレビで気になったのだろうと思われるが耳を疑う内容だ。

「等」は同じような内容、例えばアンパンマンやバイキンマン、カレーパンマン等。「他」は違う内容、例えば好きな事はアンパンマン、工作、料理他と説明すると、幾つか質問はされたが、なんとなくだが伝わったようである。

いい加減な事は言えない為、なるべく分かり易く説明したつもりではある。ただ難しい事を、難しくなく説明するのは、難しい。

訪問リハ新聞編集部 佃文王